特定課題研究「日中女性関係史の総合的研究――1930 ～ 40 年代の模索と協働」研究経過成果報告書

須　藤　瑞　代*

要　旨

本研究は，1930 ～ 40 年代において，悪化する日中関係から距離をとり，改善の道を探ろうとする女性たちの動きについて，その意義と限界を考察することを目的とする。特に，東京朝日新聞社における初の女性記者･竹中繁と，彼女が中心となって組織した「月曜クラブ」と「一土会」に着目する。「月曜クラブ」は日本の女性知識人たちの勉強会で，そのメンバーの中から中国に対する理解を深めようという声が上がり「一土会」が作られた。「一土会」では，日中関係改善を女性によって成し遂げようとする意識が醸成され，地道な活動が行われた。今年度は特にこの「月曜クラブ」「一土会」についての基礎的な研究を進めた。

キーワード：日中関係　ジェンダー　近代史　女性史　朝日新聞

1　研究概要

1920 ～ 40 年代は，日中の国家間関係が悪化していった時期であるが，その一方で日中関係改善の道を探ろうとする女性たちの動きも存在していた。とりわけ重要な役割を果たしたのは，東京朝日新聞社初の女性記者･竹中繁（しげ）（1875 ～ 1968 年）と，彼女が中心となって組織した「月曜クラブ」と「一土会」という 2 つのグループである。「月曜クラブ」と「一土会」は女性のみで構成された会で，中国に対する関心を強く持ち，とくに「一土会」では日中関係改善を女性によって成し遂げようとする積極的な活動が行われていた。この 2 つの会のメンバーには，竹中繁のほかに，高良とみ（米国で博士号取得，女性運動家，1896 ～ 1993 年），加藤タカ（東京 YWCA 総幹事，1887 ～ 1979 年），田村俊子（文学者，戦時下の上海で華字雑誌刊行，1884 ～ 1945 年），そして陳衡哲（中国初の女性大学教授，作家 1893 ～ 1976 年）などが含まれる。

2　先行研究

近代日本女性史・中国女性史の双方において，日中間の女性同士の関係を多角的，総合的に行う研究はほとんどなされてこなかった。日本の女性知識人と中国との関わりについては，たとえば進藤久

* 京都産業大学准教授

美子『市川房枝と「大東亜戦争」――フェミニストは戦争をどう生きたか』(法政大学出版局, 2014 年) は，市川の戦争との関係性を内在的に考察する中で，中国との関わりについても分析した重要な著作である。ただし，研究の焦点は市川にあり，日中間の女性同士の関係そのものにあるわけではない。日中関係史研究においても，政治・外交・経済等については研究の蓄積があるが，日中女性の交流に関する研究は，留学生研究を除けばほとんどなされてこなかった。

そこで，筆者および 4 名の共同研究者は 2012 年に日中女性関係史研究会を結成し，それ以後一貫して日中関係における女性に着目した研究を行ってきた。2014 ～ 2017 年には，「近代日中女性関係史におけるジェンダー構築の総合的研究――竹中繁を中心として」(JSPS 科研費 JP26360052 基盤 C 研究代表者：山崎眞紀子）の助成を受け，2018 年には『女性記者・竹中繁のつないだ近代中国と日本―一九二六～二七年の中国旅行日記を中心に』(科研費学術図書出版助成 17HP5091 研文出版) を刊行した。また 2017 ～ 2020 年には，「ジェンダーからみる近代日中女性関係史の総合的研究――月曜クラブと一土会を中心に」(JSPS 科研費 JP17K02085 基盤 C 研究代表者：石川照子）の助成を受けた。

本研究は，以上のような 9 年にわたる研究活動を引き継ぐものであり，従来の研究の欠落点を補う点で意義のあるものである。

3　月曜クラブと一土会

今年度集中的に行ったのは，月曜クラブと一土会に関する基礎的な研究である。以下，この 2 つの会の中心にいた竹中繁について，続いて月曜クラブと一土会それぞれの活動内容について，現段階までの研究概要をまとめる。

竹中繁が中国に対する関心を深めたのは，彼女が東京朝日新聞社の記者だった 1926 年から 1927 年にかけての半年間，中国の都市を視察する機会を得たことによる。このとき 51 歳だった竹中は，中国語の堪能な同行者，服部升子とともに中国各地の女子学校などを見学し，熊希齢夫人（朱其慧)，『大公報』編集者・張季鸞，『婦女雑誌』や『新女性』編集者・章錫琛など，近代中国女性史研究において重要な人物と次々に面会した。この経験から，特に中国の女性たちへの関心を強めていくことになり，1930 年に東京朝日新聞社を退職してからは，日本の女性向け雑誌には中国の女性を紹介する記事を，中国の新聞雑誌には日本の女性の状況を紹介する記事を書くなどの活動を行った。

その一方で竹中は, 東京朝日新聞社に働きかけて, 1928 年 3 月に女性知識人の集まり「月曜クラブ」をたちあげている [1]。月曜クラブには，竹中の呼びかけに応じ，市川房枝や平塚明子（らいてう）ら，日本の女性運動に携わる人々が集まった〔写真 1〕。当時，朝日の町田梓楼は，「ここに集まった女性を一度に失ったと仮定したら，恐らく日本の文化史を変更させるのではないかと思われるほど，現代に大きな足跡を留めている女流」たちであったと評している [2]。

月曜クラブの規模は大きくはなかった。大阪朝日新聞社の女性記者恩田和子が結成した全関西婦人連合会には 300 万人もの女性たちが集まっていた。それと比較すると，月曜クラブは毎回十数名程

度が参加する地味な会合であった。そのため，これまでに注目されることは少なく，日本女性史研究では月曜クラブのことが取り上げられることはほとんどない。しかしながら，主義主張を問わずに声をかけるという竹中の方針のもと，意見を異にする女性たちが一同に会して互いに運動方針や研究事項を発表したり批評しあったり，時には時事問題の専門家を招いて討論をするという場は貴重で，竹中の同僚の記者・新延修三は月曜クラブは「今日の日本の婦人運動が大同につく先駆を開いたもの」で，「当時としては，大英断の壮挙」だったと評価している[3]。

月曜クラブのメンバー

写真 1

この月曜クラブでは，中国に関する問題も何度か話し合われ，それが「一土会」の結成につながった。満洲事変直後の 1931 年 9 月の月曜クラブの会合では，朝日の上海特派員，北京特派員，支那部長を歴任した大西斎を招いて満洲問題について議論した。竹中の記録ノート（未公開，稲葉幸子氏個人蔵）によると，5 時までの時間が足りないほど質問が出るほどの盛況であったという。散会後，上代たの子の発議，市川房枝，金子しげり，高良とみらの熱心な賛成もあり，中華民国の婦人を知る道を拓こうという意見で一致した。そして服部升子を加えて，中華民国を語る会の最初の会が 1931 年 10 月 4 日（土）に開かれた。

基本的に毎月第一土曜日に集まるということで「一土会」と名付けられた会は，竹中の残したノートには 1933 年 1 月の会まで記録されており，臨時会も含めて 28 回行われたことが確認できる（その後も活動は不定期で行われていた）。幹事は竹中と服部升子が担当した[4]。月曜クラブのメンバーとも重複があり，図 1 に見られるとおり，月曜クラブのメンバーのうち，キリ

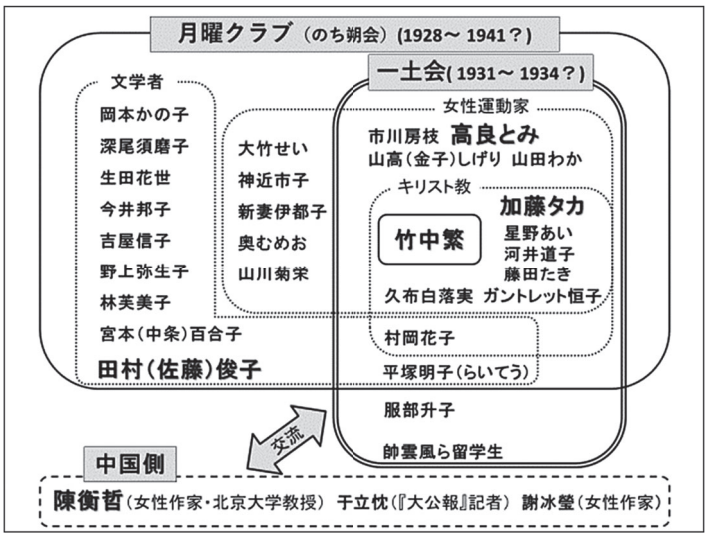

図 1

スト教関係者，女性運動家が多く含まれていた。さらに中国と関係の深い服部升子や帥雲風ら留学生などが加わっていることがわかる。

会の活動の中での中心課題は，日本と中国の問題であった。たとえば 1932 年 3 月 5 日の会合では，日中関係について激論が交わされている。当日のスピーカーは，1931 年末から満洲を旅行して帰国した久布白落実だった。久布白が旅行中，上海の女性たちに「［満洲事変について］日本は条約の一点一画も間違った事をしていない」と言い切って帰ってきたと言ったのに対し，高良とみが国条約の何たるかを一々挙げて強く再考を促したという[5]。久布白の中国旅行の内容については，竹中を含め，会のメンバーは不満であったようだ[6]。とりわけ高良とみは，自身がアメリカ留学の経験があり，国際社会の日本に対する目にきわめて敏感であった。

4　今後の展望

竹中繁は，日中関係改善の希望を持ち，「月曜クラブ」や「一土会」の活動を行っていたが，竹中の思いとは裏腹に，日中の国家間関係は悪化の一途をたどり，1937 年には日中全面戦争となった。竹中はそれでも，市川房枝とともに 1940 年に中国旅行を計画し，上海，南京などを約二ヶ月回っている。この旅行の際の身分証明書（昭和 15 年 2 月 9 日の日付）が竹中の手元に残されていた。その「渡支目的，理由」の欄には「婦人ヲ通ジテ日支親善ヲ計ル為メニ各地在留日本婦人団体及支那婦人団体ヲ訪問スル為メ北支及中支方面ニ渡支ス」（稲葉幸子氏保存資料）とある。しかしながらこの旅では思うように女性同士の交流が行えなかった。結局竹中は旅の翌年，千葉県鶴舞町に隠居し，表だった活動からは身をひくこととなった。

一方，「月曜クラブ」「一土会」の主力メンバーだった高良とみは，竹中とは対照的に戦後も精力的に活動している。彼女は，戦後の第 1 回参議院議員選挙に出馬して初の女性議員の一人となった。そして，中国と日本との関係改善にも尽力し，国際経済会議日本代表として 1952 年の第 1 次日中民間貿易協定を締結に大きな役割を果たした。1972 年まで国交のなかった時期の中国との関係を考える上で，第 1 次日中民間貿易協定の締結は重要である。それにかかわった高良の思想的な源流には，戦前の「月曜クラブ」「一土会」での経験が大きく作用していると推測される。今後の研究は，こうした「月曜クラブ」「一土会」のメンバーが戦後の日中関係にどのように関わっていくのかも含めて考察していく予定である。

【補足：今年度の研究会活動】

2020 年度は，新型コロナウイルス感染症の大流行により，国内外における資料調査がすべて不可能となった。そのため，研究協力者（石川照子（大妻女子大学），山崎眞紀子（日本大学），姚毅（東京大学非常勤講師），藤井敦子（立命館大学客員研究員））との ZOOM による研究会・読書会を開催しつつ，研究を進めた。研究会・読書会の概要は以下のとおりである。

(1) 2020 年度第 1 回会合

日時：2020 年 8 月 8 日（土）14:00 ～ 15:30　ZOOM にて開催

内容：今年度の研究活動の方向性について討論

「月曜クラブ」「一土会」に関係する「人」および「場」に焦点をあてる必要性について議論を行った。特に重要な「人」については，加藤タカ，ガントレット恒子，久布白落実，劉王立明，陳衡哲，高良とみ，田村俊子，岡本かの子，竹中繁，服部升子，帥雲風，市川房枝などを候補とした。また，「場」に関しては，「月曜クラブ」「一土会」それぞれの活動を明らかにしていくとともに，他の組織との関係を見ていく必要性が指摘され，たとえば全関西婦人連合会，汎太平洋婦人会議，WILPF などとの関係性を見ていくこととなった。

さらに，竹中繁史料のデジタル化・データベース化をいかにすすめるかについても検討したが，今年度はスキャナーやカメラ撮影によるデジタル化を行うこととし，最終的なデータベース構築については，今後の課題となった。竹中繁資料については，ご遺族の方が自宅に保存しているため，今年度は訪問して閲覧することが不可能であった。そのため，以前に撮影していたものなどを適宜整理・利用することとした。

(2) 2020 年度第 2 回会合

日時：2020 年 11 月 1 日 10：00 ～ 11：45　ZOOM にて開催

内容：書評会　石月静恵・大阪女性史研究会編著『女性ネットワークの誕生 全関西婦人連合会の成立と活動』（ドメス出版，2020 年）

担当：須藤瑞代

本研究とも深く関係する全関西婦人連合会について，その意義と限界について討論した。筆者が本書の内容について論評を行い，編著者石月静恵氏からコメントをいただいた。1919 年に，大阪朝日新聞社の恩田和子らを中心として誕生した全関西婦人連合会は，日本の既存の女性団体を集めてその要求を結集しようとする初めての試みであったこと，意見や宗教，主義主張の枠を超え，共通の課題についてともに要求する活動で，既存の女性団体に刺激，目標の明確化へつながったことなどを確認したうえで，その後戦争協力体制に与していくことになった経緯などについて議論を行った。

(3) 2020 年度第 3 回会合

日時：2020 年 12 月 28 日 13:00 ～ 15：00　ZOOM にて開催

内容：『高良とみ著作集』第 3 巻，第 4 巻読書会

共同研究者 5 名で分担して，高良とみの 1925 年から 41 年までの著作を概観した。高良は，1930 年代前半には個人主義重視で母性を批判していたが，1937 ～ 38 年を境に母性主義を主張するようになっている。この高良の戦時の言説，行動をどう評価するかという点が一つの注目点になりうることなどを討議した。また，1937 年以前の高良の著作についても読み込む必要があることが確認され，

次回は第 1 巻，第 2 巻の読書会を行うこととなった。

(4) 2020 年度第 4 回会合

日時：2021 年 3 月 7 日 10:00 ～ 12：20　ZOOM にて開催

内容：『高良とみ著作集』第 1 巻，第 2 巻報告

今回は，高良とみ 19 歳から 28 歳までの文章を講読した。この時期，とみは日本女子大を卒業して渡米，1921 年に国際婦人平和自由連盟大会（ウィーン）参加，矢島楫子の軍縮請願書ワシントン会議提出に同伴，22 年に学位論文を提出，23 年から九州帝国大学の研究員に，24 年にはタゴール来日時の通訳をつとめるなど，精力的に活動していた。その一方で著作集では “S” とされている人物と出会って結婚の約束をするも，結果的に別れることとなった。

高良とみは，留学前は「良妻」になることを望む文章も書いていたが，留学するとすぐに思想は変わり，学業を修め研究者として生きる方向に向かっている。S への手紙にもそれがはっきり表れていた。また母親がとみに対してかなり強く影響をおよぼしている。高良はのちに 1940 年代になると全体主義へと転じていく点について，今後さらなる詳しい分析が必要となることが確認された。

注

1 「月曜クラブ」は竹中個人による会ではなく，東京朝日新聞社学芸部の主催という形であった。「婦人室　新しく出来た月曜クラブ」（『東京朝日新聞』1928 年 4 月 2 日）。

2 町田梓楼「週間話題」（香川敦子『窓の女　竹中繁のこと―東京朝日新聞最初の婦人記者』新宿書房, 1999 年, 128 頁）。

3 新延修三『われらヒラ記者』波書房，1973 年，156 頁。

4 竹中の残した月曜クラブの記録ノートによると，第一回目の参加者は，市川房枝，金子しげり，ガントレット恒子，久布白落実，服部升子，竹中繁ら 12 名であった。

5 竹中繁の記録した一土会についてのノート（1932 年 3 月 5 日）による〔未公開〕。

6 竹中繁子「総選挙後の言」（『婦人』第 9 巻第 4 号，1932 年）。

Progress report: Comprehensive study of the history of relations between the Chinese and Japanese women's movements: focusing on the cooperation from the1930s to the 1940s

Mizuyo SUDO

Abstract

This study investigates the significance and limitations of some attempts by members of the Japanese women's movement to address worsening Sino-Japanese relations during the 1930s and 1940s. This essay examines the life and work of Shige Takenaka（竹中繁), the first female journalist to work for Tokyo's leading newspaper, *The Asahi Shimbun*. Takenaka organized the Monday Club（月曜クラブ), a study group of Japanese female intellectuals, and the Ichidokai（一土会), a group that was started by members of the Monday Club who wanted to understand the social and political views of Chinese women. The Ichidokai was a small but active organization that worked to improve the relations between Japanese and Chinese women.

Keywords : Japan-China relations, Gender, Modern history, The history of women, Asahi Shimbun